

第2回 World Union of Wound Healing Societies' Meetingに参加して

札幌医科大学 皮膚科
小野 一郎



写真1

第2回 World Union of Wound Healing Societies' Meetingの会場となったPalaid des Congres

本年の7月8日から13日までフランスのParisで開催されました第2回World Union of Wound Healing Societies' Meetingに参加して参りましたので会員の皆様にご報告させていただきます。この学会は既にご存じのように4年前に第1回目がDr. Michael Stacey の主催でオーストラリアのメルボルンで開催されたのですが、その時点では従来のアメリカ合衆国のWound Healing Society (WHS)やヨーロッパのEuropean Tissue Repair Society (ETRS)、さらには私達の日本創傷治癒学会とは全く無関係に独立した形で開催されておりました。そのため実質的には最初の国際的な創傷治癒の分野の治療ならびに基礎研究の学会として大変に期待されていた学会です。ちなみに今回の学会の会長はフランスのProf. Luc TéotでEuropean Pressure Ulcer Advisory Panel (EPUAP)、ETRS、WHS、European Wound Management Association (EWMA)、Société Française et Francophone des Plaies et Cicatrisations (SFFPC)の共催の下に開催されました。なお、本学会の北島理事長もScientific Committee members from participating societiesの一員としてプログラムに明記されておりました。

学会の会場はパリの凱旋門から徒歩10分程度のPorte Maillotに位置するPalaid des Congres(写真1)で6日間の朝から夕方までのほとんどすべてを費やして多いときは12会場で同時に発表が進行するという盛大な会でした。私は仕事の都合もあり7月7日の昼に札幌を発ち、同日の深夜に成田からParisへ向けて出発しました。実際には学会の受付も8日の7時過ぎから開始され、会議が8時から開始されましたので当日の未明にParisに到着して13日の深夜にParisを発った私は幸い長い期間の学会の全てに参加することができました。



日本創傷治癒学会
2004.10
No.23

●日本創傷治癒学会事務局

〒160-8582

東京都新宿区信濃町35

慶應義塾大学医学部外科学教室内

tel. 03-3353-1211

(内線62269)

fax.03-3353-2681

e-mail: info@jswh.com

URL: <http://www.jswh.com>

その様な事情でParisに8日の未明に到着し、直ちにホテルに check in し、若干の休憩の後に朝食をとって、勇んで(?)会場のPalaid des Congresに同行させて頂きました東邦大学病理の赤坂先生と向かいました。ところが受付の場所が分かりません…。何度か会場で警備に当たっている人たちに聞いてどうにか3階の受付にたどり着くまで会場に入りましてからおよそ15分以上かかってしまいました。会期の最初であったこともあったのですが、会場の案内も不十分でこの時点から学会の運営に少し不安がよぎり始めました。しかし、どうにか7時過ぎに受付にたどりついた私たちは大変に幸運でした。私たちは事前登録してあったこともあり15分ほどで手続きが終了、コンgresバックを受け取って8時からの学会開始には20～30分ほどの余裕を持って会場へと向かうことができたのですが、事前登録の受け付けは3箇所、当日登録も2箇所の受付で進みましてのでいずれも直ぐに長蛇の列という状態となっていました。特に当日受付の方は深刻で学会の初日は3時間並んでやっと登録でき、朝から並んで学会に参加できたのは午後のセッションからという本当に笑えない大混乱で学会の幕が開きました。ちなみに長蛇の列が消えたのは学会の3日目の午後でした。特に学会前半の発表の先生達は深刻で、computerでの発表のpreview roomの部屋も大変に分かりにくい上に案内も小さく出されてい

るのみで、時差に加えて大変なストレスであったと推察致します。本当にお疲れ様でした。当然、この点に関しては参加者の不満も多く、やはり前日の午後から受付が可能で学会の開始時には大半の参加者が登録を終了できるような会期設定とするべきであったと感じます。特に後から参加者が(学会の公称で)5500人に対してcomputer 2台で初日から学会と平行して当日受付を進めるというのは大変に無謀な話であると感じました。話が前後しますが奇妙なことに opening ceremonyは学会初日の夕方からでした。この opening ceremonyには本学会の事務局を担当して頂いております慶應義塾大学外科の大谷先生、東邦大学病理の赤坂先生、慶應義塾大学形成外科の貴志先生をはじめとして多くの日本からの参加者が集っていらっしゃいました。しかし、会場にはおよそ400人ほどが集っただけで公称5500人の参加の学会の割には寂しい感じがしました。会は先に述べたヨーロッパ、フランスを中心とするサポートしている学会から代表するメンバーがPresidentのTéot先生の開会の挨拶に続いて次から次へと挨拶するという異例で、かつこの会の成り立ちを象徴するような内容でとりたてて感動的なことはありませんでした。ただ、会の最後にPresidentのTéot先生がヨーロッパにおける創傷治療の歴史を概観された講演をされました。中世や近代の創傷治療の歴史を短い時間で知ることができ



写真2 Opening ceremony

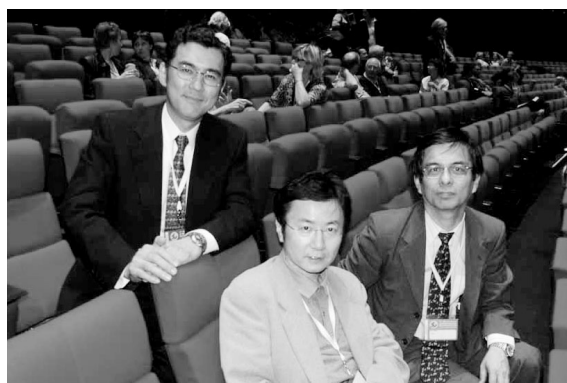


写真3 Opening ceremonyの会場で、
日本からの参加者：左から大谷先生、赤坂先生、筆者。

て大変に興味深かったのですが、日本や中国のようなアジア、その他の地域の歴史がほとんど触れられていなかった点に不満が残ったのは私だけだったでしょうか? (写真2,3)。

このようにどうにか学会初日も無事終了したのですが参加者の多さが目立ったのは受付ばかりで、mainの大ホールで学会の最初を飾ったFerguson先生とGabbiani先生のscarringのPlenary sessionの参加者が30人程度であったのは大変に残念でした(この会場はおそらく3500人以上収容可能です)。全期間を通して本学会は医師と看護師をはじめとするco-medicalに加え、基礎研究者が集う文字通り創傷治療の全てを横断的にcoverする内容でした。学会では先に述べましたように12に及ぶ会場で連日進められ、12のPlenary session、60のSymposium、96のWorkshop、10のControversies、3つのFundamentals、6の教育courseに加え、100演題に近いoral presentation、200前後のposterという盛りだくさんの成果が次から次へと発表されていきました。中でも本学会に関連が多い基礎研究の分野でも数多くの興味深い演題が発表されていました。特にgrowth factor、stem cell、遺伝子治療、細胞治療のような最先端の研究成果に関しても日本、米国、ヨーロッパに加えて中国や韓国からも大変に高度な演題が発表されていました。ただ、やはり学会の性格を反映して基礎研究の発表会場は小さい部屋が割り当てられる傾向が強く、また、会場が分かりにくい場所に割り当てられていたりで参加者が必ずしも多くなかったのは少しもったいない感じがしました。また、学会の運営と連絡の不備のためか欠演も目立ったのにはがっかりさせられました。私も会の後半は可能な限りoral presentationのsessionに顔を出すようにつとめたのですがこの様な場に必ず欧米の大御所の先生の何人かが最初から最後まで出席し、若い研究者に向か

って質問やcommentを発言し続けていたのが大変に印象的でした。このような努力が若い研究者の研究意欲を持続させ、良い意味で発表の場に緊張感を持たせていることを実感しました。本学会の会員の発表も当然のことながら高度で聴衆の注目を集める物ばかりでした。中でも慶應義塾大学の貴志先生、川崎医科大学の篠山先生のような若い世代の先生達の発表内容が大変に高度であるばかりでなく、ご発表、質疑応答も大変に見事で同じ学会の会員として大変に誇らしく感じますとともに、先生達の日頃の努力が見事に開花してきているとの印象を強く受けました。話は飛びますが学会の会期中に開催されたWRRのEditorial meetingでも昨年の日本からの同誌への投稿数が15題で米国、UKに次いで3番目(UKは16題でしたのでほぼ同数2位)とのことでした。今後さらに本学会から若い研究者が国際学会で発表、投稿して頂けるように本学会が今までにも増してencourageすることが重要であるし、またその努力が確実に報われているとも感じました(写真4)。

一方、看護のsessionは参加者が多い看護師のmemberに会場が埋められているという状態でした。このように参加者がフランスを中心としたヨーロッパのco-medicalが多いこともあり、発表言語は英語とフランス語の同時通訳で進められました。ただはじめは



写真4 発表を終えて--会場の一隅で。
左から貴志先生、大谷先生、秋田先生、赤坂先生、筆者。

英語のみで発表が進む物と勘違いをしておりましたので、突然フランス語で発表が始まるとびっくりしてしまいました。ただ、同時通訳の方々の通訳は見事で発表に少しの遅れで絶妙に通訳しているのには大変感心しました。そのような事情で発表内容の理解自体には余り問題が無かったのですがdiscussionがうまくかみ合わない場面もあり、フランスの国の事情もあるのでしょうか、できれば英語のみでの発表でと感じたりもしました。なお、今回の発表は全てcomputer presentationで進められましたが特筆されるべきは全ての演題のdataがWindowsサーバーに納められており、どここの会場からでも自分の演題を直ちに発表できるシステムを導入していたことです。演題発表が全てcomputer presentationであることの事前通知やmacの演題dataが収納できない等の不便さはあっ

写真5 Preview roomの様子。
発表用のdataをこちらからWindows
サーバーにupload できる。



写真6 発表用のdataをサーバーにuploadするのを
サポートしてくれた学会のstaff。

たものの、私の知る限りこのようなシステムでのこのような大きな学会の運営は初めての経験でした。また、私の参加した会場で見ると一度もトラブルが無く、大変に順調に講演が進められていたのには感心しました。特にpreview roomで受付に当たっていた方々の笑顔での対応、さらに技術的なサポートをしていた人々の技術の確かさは本学会のいろいろなマイナスの印象をプラスの方向に埋めるのに十分な物でした。私自身も自分の発表のdataの圧縮や修正などでは大変にお世話になり、無事発表を終えることができ、感謝しています(写真5, 6)。

さて、私自身が本学会で印象深かったsessionは大変に多かったのですが中からいくつかご紹介致します。1つ目は最後の日に米国のMustoe先生が座長となって進められた Clinical cases interactive presentationです。このsessionではMustoe先生が用意したいろいろな瘢痕を持つ患者様の治療法を会場の参加者と議論するという物でした。私たち日本人にもなじみの多い、耳介のケロイド、手首の瘢痕、にきびの瘢痕、熱傷瘢痕などの症例について真摯な議論が行われました。このsessionでは私自身も日本で行われている治療に関して発言をしてきましたが、どちらかといいますと有色人種の問題として欧米でとらえられがちであった問題がこのようにして注目され、



写真7 Mustoe先生が座長となって進められた
Clinical cases interactive presentationの様子。

写真8 企業展示の様子。

治療法が議論されているのには大変に感動しました(写真7)。2番目は学会初日に会長のTéot先生と米国のFalanga先生が参加して行われた Algolism change: When to adopt new technologies? Expert opinion vs randomized control trialです。Falanga先生が基礎研究の成果を臨床に応用するためには多施設のrandomized control trialが重要であるとの意見を述べたのに対して、Téot先生は研究面での成果を臨床に利用するために必要なのは感性と経験豊かなexpertの意見であるとの発表を行いdiscussionが行われました。私は今まではrandomized control trialのみが臨床を変えるのではと考えていましたが、Téot先生の意見にも共感するところもあり大変に考えさせられました。同様のdebateは動物実験が臨床の手法を変えるためにどういう意義をもっているのか否かという点でも行われていました。ここでは次期会長でCanadaの研究面での大御所であるSibbald先生が動物実験の結果をそのまま鵜呑みにして信じては間違いで私は25年間の動物実験から得た事実はほとんど無い(おそらく逆説的に)と発言していたのにはこれもまた考えさせられました。最後に最も印象深かったsessionはアフリカからの臨床家が2人で座長を務めていたKeloids (basic aspects and treatments)です。ここでは有色人種、特に黒人における高度なケロイドの症例が呈示され参加者に衝撃を与えていました。参加者の中には scar preventionの研究の権威であるFergusonを始めとしたそうそうとした研究者が参加し、固唾をのんでアフリカの臨床家の発表に耳を傾け真摯に議論している姿が大変に印象的でした。私も黄色人種におけるケロイドは見慣れているのですがこの方面における研究の重要性和私たち日本人の果たすべき役割が大変に大きな分野であるとあらためて実感しました。このように世界の最先端の研究者と開発途上国を含めた世界の臨床家やco-medicalのstaffが一堂に介して議論できるとい



写真9 近代美術館で。シャガールの絵の前で。

う点がWorld Union of Wound Healing Societies' Meetingの真の意味での意義ではないかと感じたsessionでした。また、会場の一角では企業展示が大規模に開催されており、新しい治療用の被覆剤、ベッドなどが所狭しと並べられておりました(図8)。

あとは例によってafter fiveのことになりますがParisのことにつきましては会員の皆様も既にご存じのことばかりでしょうから余り書くことはないと思います。ただ、30年以上前のフランス、Parisを知っている者としてはEUに参加してからParisの人々が大変にfriendlyとなり英語がどこでも問題なく通じるようになり、私たち日本人にとっても楽しみやすくなったことです。これはレストランなどで食事するときに大変に重要な点で今回も同行させて頂いた赤坂先生とおいしい食事とwine

をほとんど毎晩の様に楽しませて頂きました。また、ご存じのようにParisにはたくさんの美術館があります。が夜は9時頃まで開館している美術館も多く、学会に参加した後に訪れることもできました。私自身は今まで何度か見たいと思ってもなかなか見ることができなかったシャガールの絵が余り期待せずに訪れた近代美術館の一部屋に飾ってあるのを見つけ、大変に感動しました。それだけでも今回Parisに行っても良かったと感じてしまいました(写真9)。

このように運営面では参加者の小言が多く聞かれた学会でしたが企画や内容、さらには presentation 法や運営に当たる人々のhospitalityなどフランスならではの良い点も多く、Parisと言う町の持っている多

大な魅力を加味したとき私自身はどうしても甘い点数を付けてしまいます。参加して大変に勉強になり、考えさせられ、そして楽しめた学会でした。4年後のWorld Union of Wound Healing Societies' MeetingはProf. Gary Sibbaldの下でCanadaのTorontoで開催されることになりましたので会員の皆様は是非今から準備をして頂きご参加をご考慮ください。そして会員の皆様の力でこの分野での日本創傷治癒学会の貢献もさらに大きな物とできますように努力したい物です。

(使用しました写真の一部は東邦大学の赤坂喜清先生撮影のものです。)

第34回 日本創傷治癒学会のご案内

第34回日本創傷治癒学会 会長 三輪晃一教授
(金沢大学大学院医学系研究科がん局所制御学分野)

第34回日本創傷治癒学会を下記の通り、開催いたします。
会員の皆様の多数ご参加をお願い申し上げます。

会 期：平成16年 11月29日(月) ～ 30日(火)

会 場：石川県文教会館：<http://www.bunkyo.or.jp/>

〒920-0918 金沢市尾山町10-5

JR金沢駅よりバス10分(南町下車／徒歩2分)

JR金沢駅よりタクシー8分

連絡先：第34回 日本創傷治癒学会事務局

住 所：〒920-8641 金沢市宝町13-1

金沢大学大学院医学系研究科がん局所制御学内(外科学第二)

Phone: 076-265-2362

Fax. : 076-234-4260

E-mail: rieyama@surg2.m.kanazawa-u.ac.jp

なお、学会最新情報は当学会HP <http://www.jswh.com/> をご参照下さいませ。